

自然遊学館だより

2005 SPRING



2005.04.11 発行
貝塚市立自然遊学館

■行事レポート

- 「春の七草摘みハイキング」……………1
- 「近木川 源流探検」……………1
- 「冬の二色浜 打ち上げられた貝拾い」……………2
- 「冬の林 千石荘探検とバードウォッチング」……………3
- 「自然遊学館の友だちあつまれ
—子どもの成果発表会—」……………4

■いきものよみもの

- 千石荘で見たオオタカの狩り・失敗編……………5
- 近木川の水生昆虫4:コオニヤンマ……………6

■【泉州生きもの歳時記】

- シラスウナギ……………7
- ユキワリイチゲ……………8

■投稿

- 自然遊学館で職業体験をして
(貝塚市立第四中学校 2年 久下 正太) ……8
- 貝塚市海塚でハマデラソウ群落の初記録
(貝塚市道路公園課 清水千尋、西澤真樹子) ……9
- 寄贈標本の紹介……………11
- 遊学館スタッフ日誌より……………11
- おしらせ
- 新館長あいさつ……………12
- 近木川河口模型リニューアル……………13
- 自然遊学館だよりの表紙に
子どもの絵が登場します……………13
- 「貝塚の自然 第7号」が発行されました……………14
- 秦祐宣・貝塚の植物写真展……………14

No.35

■行事レポート

春の七草摘みハイキング

場所：蕎原

日時：2005年1月7日(金) 10:45~14:00

参加者 45名

セリ・ナズナ・ゴギョウ・ハコベラ・ホトケノザ・スズナ・スズシロの「七草つみ」の行事は、毎年、名越付近の田や畑で行っていましたが、年々乾燥がすすんだためかセリなどがみられなくなりました。そこで、今年は蕎原で七草つみをすることにしました。

12月とは思えない暖かい日が続いていたのですが、お正月寒波があり年末に積もった雪が残っていました。蕎原のバス停集合。

七草を探して歩き始めると、すぐ見つかったのはハコベ(ハコベラ)です。ハコベは道すがらあちらこちらに生えています。セリも少し見つかる。里山の風景を見ながら、田や畑の続く道を歩くのは気持ちがいい。まもなく、コオニタビラコ(ホトケノザ)が一面にはえている田を見つける。そのあと、セリ、ハハコグサ(ゴギョウ)、ナズナとつぎつぎに採集。ハハコグサは珍しい植物ではないのですが、ここでは、一カ所に集中して生えていました。



採集後は「ほの字の里」で七草がゆをいただきました。「ほの字の里」特製がゆ(ホタテの出汁でおもちいり)、地元の方のおつけものもついていました。とってもおいしく、ケーブルテレビの取材もはいて、和やかに七草の行事をおえました。また、来年が楽しみです。

(湯浅 幸子)

近木川源流探検

場所：和泉葛城山本谷

日時：2005年1月29日(土) 10:00~15:00

参加者 21名

源流探検はここ3年間、予定していた日が雨天にたたられ中止を余儀なくされていたのですが、ようやく今年是小春日和に恵まれ、敢行することができました。

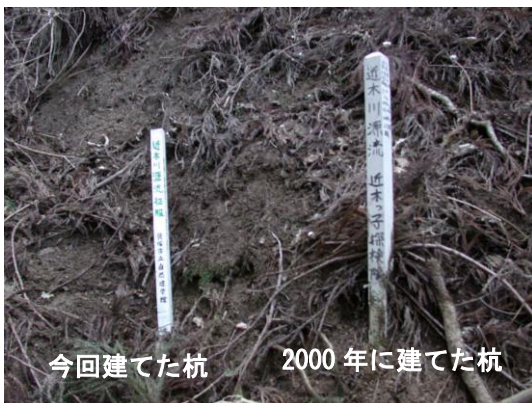
蕎原バス停に集合した後、近木川を右手に見て、ひたすら川上を目指し歩きました。春日橋を越え、いよいよ傾斜がきつくなる本谷筋に入りました。この辺りからは溪谷と呼ぶにふさわしく、川幅は細く、所々で急峻な崖から流れ落ちる滝になっています。そしてスタートから約1時間半後にお昼休憩の地点までたどり着きました。

一服の後、枝分かれして流れ入る川のトチグラ谷に方向をしばり、突き進んでいきました。道中には残雪が残る場所があり、子供たちは楽しそうに雪とじゃれあっていました。しばらく行くと、川幅50cm足らずになり、水量もちよろちよろになっていき、そろそろ源流かという期待が高まるところで、最後の難所が待ち構えていました。



トチグラ谷沿いに歩を進める

道なきところを沢歩きし、倒木をかわしながら登って行きましたが、地盤がゆるくズルズルとすべり落ちる場面に何度も遭遇しました。それでも四つんばいに這いながら前進し、ふと見上げると2000年に源流探検をしたときに建てた記念杭がそこにありました。ついに今年も源流までたどり着きました。参加者に記念杭を順番に回して自ら名前を記した後、打ち込みました。



近木川源流登頂記念

下山は滑らないように足元を確かめながら、ゆっくり降りていきました。蕎原バス停までの長い道のりを再び歩き、子供たちを含め、全員無事で難関の源流探検を終えることができました。

最後に、源流の下見に1月19日にスタッフの山田量崇と行った際に、ブチサンショウウオを1匹採集したことを記しておきます。

(山田 浩二)

冬の二色浜 打ち上げられた貝拾い

場所：二色浜（近木川河口右岸）

日時：2005年2月12日（土）13:00～16:00

参加者 47名

冬場の典型的な北西風が吹く中、近木川河口右岸の海に面した砂浜で行いました。講師には例年のように児嶋格先生に来ていただきました。打ち上げられた貝殻を拾う前に、浜を覆い尽くすばかりのプラスチックやビニール、ビン、空き缶などのゴミを拾い集めました。右岸側には左岸側に比べ、たくさんのゴミが打ち上がるのが現在の近木川河口の特徴であり、これは付近の海流が二色産業団地の埋立地を含めた海岸地形の影響を受ける結果だと考えられます。

ゴミ拾いの後は、目を凝らして浜に打ち上げられた貝殻などの漂着物を探しました。貝殻だけで38種、その他、カニの死体や抜け殻、ゴカイの棲むチューブ状の棲管、様々な木の実が採集できました（次頁の表参照）。採集したものは館の多目的室に持ち帰り、種名を書き記したラベルを付け、本日の観察会のおみやげとしました。

二色浜の漂着物（自然物）

和名			近木川河口右岸前浜 2005/2/12 自然遊学館観察会 講師：児嶋 裕	
貝殻	海産			
1	フネガイ科	サルボウガイ	cc (L)	
2	イガイ科	ムラサキイガイ	c	
3		ホトギスガイ	c (L)	
4	イタヤガイ科	イタヤガイ	r	
5	ナミマガシワ科	ナミマガシワ	cc (L)	
6	イタボガキ科	マガキ	cc	
7	ツギガイ科	イセシラガイ	rr (L)	
8	ザルガイ科	トリガイ	r	
9	バカガイ科	バカガイ	r	
10		ミルクイガイ	rr (L)	
11	手ドリマスオ科	クチバガイ	r	
12	マテガイ科	マテガイ	rr	
13	ニッコウガイ科	サクラガイ	r	
14		ヒメシラトリガイ	r (L)	
15	マルスタレガイ科	ウチムラサキ	r	
16		カガミガイ	c	
17		アサリ	cc (L)	
18		オニアサリ	c	
19	イワホリガイ科	ウスカラシオツガイ	r	
20	ヨメガカサガイ科	ヨメガカサ	rr	
21	ニシキウス科	イシダタミ	r	
22		コンダカガンガラ	r	
23		アシヤガイ	rr	
24	タマキビガイ科	タマキビガイ	r	
25	カリバガサ科	シマメノウネガイ	cc	
26	タマガイ科	ツメタガイ	cc	
27		ハナツメタガイ	r	
28		ネコガイ	rr	
29	アッキガイ科	アカニシ	c	
30		レイシ	c	
31		イボニシ	c	
32	フトコロガイ科	ムギガイ	c	
33	ムシロガイ科	アラムシロ	c	
34	エソバイ科	バイ	rr	
	陸産			
35	オナジマイマイ科	クチベニマイマイ	rr	
36		ウスカワマイマイ	rr	
37	リンゴガイ科	スクミリンゴガイ	r	
38	タニシ科	ヒメタニシ	rr	
甲殻類	1	イワガニ科	モクスガニ	r
	2	ガザミ科	タイワンガザミ	rr
多毛類	1	カンザシゴガイ科	エソカサネカンザシの棲管	r
	2	ナナテイヤメ科	スコカイソメの棲管	c

凡例：数量……cc 多数、c 普通、r 少数、rr ごく少数 (L)……生貝確認



打ち上げられた貝殻を説明する児嶋先生

(山田 浩二)

冬の林 千石荘探検と バードウォッチング

場所：千石荘

日時：2005年2月26日(土) 10:00~12:00

参加者 25名

雪の舞い散る中、千石荘の鳥の観察会が行われました。寒い中でも、がんばって観察したからでしょうか、ワシタカ類が4種類も現れました。最初の集合の場所にもミサゴが真上を通り抜け、肉眼でもじっくりみられました。

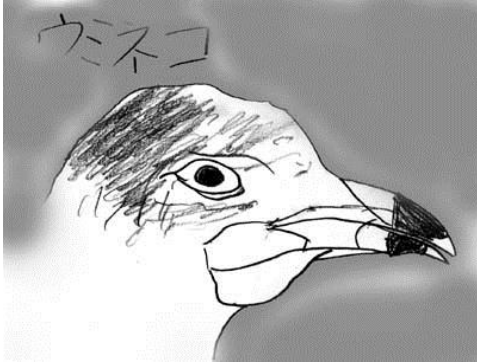
千石荘に到着して、すぐにカワウを眺めると、参加者の方が繁殖羽のカワウの白い顔に気がつき、みんなで観察しました。尾を立てて、体を前に出すような姿の求愛のポーズも観察できました。足元にはカンサイタンポが咲き、ツクシがでていました。

カワウのいる池に近づくとすぐにハイタカが上空を通過しました。そこから、ボタン池に向かう途中には、オオタカがドバトの群れに急降下して、狩りをする姿がみられました。興奮も冷めやらぬまに、ノスリも現れ、参加者のみなさんは夢中でオオタカとノスリを観察しました。

最後にボタン池ではアライグマとタヌキの足跡を比較しました。ヒメタニシやドブガイの貝殻も拾え、無事に観察会を終えました。



カンサイタンポポが咲きはじめていました



確認された鳥類

千石荘 28 種類

ダイサギ、アオサギ、マガモ、コガモ、ミサゴ、オオタカ、ハイタカ、ノスリ、ユリカモメ、キジバト、ドバト、コゲラ、キセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ルリビタキ、シロハラ、ツグミ、ウグイス、エナガ、シジュウカラ、メジロ、カシラダカ、アオジ、カワラヒワ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス

近木川河口 27 種類

カンムリカイツブリ、カワウ、コサギ、アオサギ、カルガモ、コガモ、ヒドリガモ、アメリカヒドリガモ、ホシハジロ、シロチドリ、ユリカモメ、セグロカモメ、カモメ、ウミネコ、キジバト、ドバト、ヒバリ、ハクセキレイ、ビンズイ、ヒヨドリ、ツグミ、メジロ、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス

(宮本 久美子)

自然遊学館の友だちあつまれ

—子どもの成果発表会—

場所：自然遊学館 多目的室

日時：2005 年 3 月 26 日(土) 13:00~16:00

参加者 29 名

平成 16 年度の自然遊学館の活動に参加した子供たち、高校生たちがあつまって、年度

最後の行事が行われました。クイズ「自然遊学館 Q&A」や遊学館オリジナル神経衰弱ゲーム「生きものビッグカードあわせ」を楽しんだりしたあと、子どもたちの発表がありました。

大きな紙に絵を描いてきたり、作文を発表したり、標本を作ったり、魚の水槽を持ってきたりと、それぞれ工夫して遊学館で学んだこと、来年やってみたい行事などを次々と発表しました。

それぞれの発表は表のとおりです。

子どもの成果発表会発表内容

発表者	テーマ	発表の内容
岡田真太郎	魚の歯の標本	自分で釣った魚の歯を標本にした。標本箱を夏休みの自由研究に出して、観賞をもらった。
真鍋誠志郎	遊学館に来て	自然遊学館に通って知ったいろいろなことを、遊学館のマップをつくって紹介。
"	できるように なりたいたいこと	カブトムシを木登りして捕れるようになりたい。
神野直研	魚の飼育	おじちゃんが二色浜駅のうらのため池で捕ってきた魚を、エアポンプなしで3ヶ月間飼っている。まだ一匹も死なせていません
喜多悠香	花のアルバム	いろいろな花をおぼえた。写真に名前を付けて、アルバムを作りました。表紙もきれいにかきました。
浅井夏海	カマキリの虫	カマキリの腹から虫が出ることを知って、ハラピロカマキリで実験して3匹のハリガネムシを探った。岩崎先生に教えていただいた。
日向向日葵	池さらいのこと	トンボの池干しがおもしろかった。モンヤマのヤゴが少なかった。なのかちゃんが水に入りたがって濡れた。
高野晴一郎	遊学館でやって みたい行事	モズのはやにえさがしをした。
"	アメリカのハチドリ	アメリカのユニバーサルスタジアムではじめてハチドリを見た。
吉田侑生	お姉ちゃんと見た ホテル	数年前、お姉ちゃんとみた葛城山のホテルがよかった。
神野直研	遊学館でやって みたい行事	葛城山で水生昆虫探しをした。

今年も高野朝子さんは、冷静な集中力でカードを連続4回取りして、まわりの子どもたちから『すげー！』と尊敬を浴びていました。岡本拓磨くんも連続2回取りを達成。浅井いずみちゃんはちょっと風邪がみでしたが、がんばってカードを取りました。こっそりまげておいた「ババ」のカードは、酒井智子ちゃんにあたり、お姉ちゃんの陽子ちゃんと大笑いしていました(他のカードは貝塚の動植物でしたが、「ババ」には遊学館スタッフの顔が大きく印刷されていました)。



クイズの答え、わかるかな？

(西澤 真樹子)

■いきものよみもの

千石荘で見たオオタカの狩り・失敗編

2月21日、小雪のぱらつく中、千石荘へバードウォッチング行事の下見にでかけました。

私たちがオサガ池からボタン池に抜ける水田地帯に入ると、**ドバト**の群れが急かされたようにぐるぐる飛びまわっています。どうやら上空の**オオタカ**を気にしている様子。しばらく観察していると、突然**オオタカ**が**ドバト**の群れの中に突っ込みました。群れを散らしてはぐれた個体を狙おうという作戦らしいのですが、群れの団結力が強く、失敗。**オオタカ**は近くの枝に止まって羽づくろいをしながら気を取り直して再挑戦。しかしまた失敗でした。結局この日は狩りの成功シーンは見ることができませんでした。追いかける方も疲れるでしょうが、休むまもなく延々飛び続ける**ドバト**もたいへんです。

「**タカ**」と聞くと、一撃必殺、狩りの名

人、というようなイメージがあったのですが、いつでもうまくゆくわけではないようです。一日がんばって狩りの成功率はどれくらいなのでしょう。空腹のまま何日間がまんできるのか、気になります。



何度も何度も挑戦していたオオタカ

(※中島徹夫氏撮影)

この日は、最終的に5種類のタカが確認できました。下見に来ていただいた大阪市立自然史博物館の和田岳学芸員からは『**オオタカ**、**ノスリ**、**ミサゴ**、**ハイタカ**、**トビ**と、大阪の冬の里山で見られるタカが全部見られました。**ミサゴ**は主に海岸で見られる鳥なので、ちょっと意外です。』また、オサガ池手前の藪で確認した**アカハラ**については『このあたりで越冬するのはとてもめずらしい。』とコメントをいただきました。

※オオタカの写真は、2005年2月26日観察会当日に中島徹夫氏が撮影されたものです。

(西澤 真樹子)

近木川の水生昆虫4：コオニヤンマ

主に丘陵地を流れる川に棲むコオニヤンマの幼虫は、一目見ると忘れられないほど、独特の形態をしています(図1)。とにかく「平べったい」のです。この形態は落葉などが溜まった場所でその隙間や下に隠れるのに適した形態と言えます。また、この形態では、イトトンボの幼虫のように水草にしがみつことも難しいでしょうし、シオカラトンボやオニヤンマの幼虫のように水底の砂や泥に潜ることも難しいと思われます。



図1. コオニヤンマ幼虫

オニヤンマより小さいという意味で付けられた和名を持ちますが、ややこしいことに、オニヤンマ科ではなく、ヤンマ科でもなく、サナエトンボ科に属します。コオニヤンマの体サイズは、日本産サナエトンボ科の中では最大です。

これまで自然遊学館が行ってきた近木川の水生昆虫に関する調査では、上流は蕎原の落合橋、梶谷の木戸橋から、下流は脇浜まで、広い範囲で採集されています(図2: 岩崎・山田、2004)。図鑑などでは「丘陵地を流れ

る川に棲む」と書いてありますが、幼虫は河口付近にもいることがわかりました。

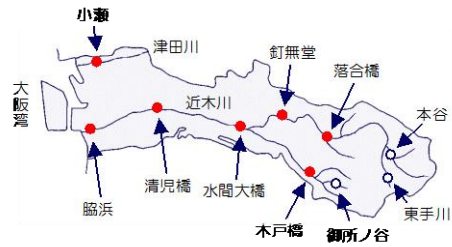


図2. 梶谷市内におけるコオニヤンマ幼虫の分布
● 年間6回の調査で幼虫が採集された地点
○ 年間6回の調査で幼虫が採集されなかった地点

では、上流から下流までのどの辺りに多く生息しているのでしょうか。表1では、上の行ほど上流の調査地になるように並べてあります(各年度の調査回数は6回)。落合橋から、釘無堂、水間大橋にかけて採集個体数が多く、標高約620mの東手川や標高約450mの本谷では採集個体数がゼロでした。また、清児橋より下流では採集個体数が少なく、幼虫が採集された時期が9月以降に限られるという結果になりました。

表1. 近木川および津田川の各調査地で採集されたコオニヤンマ幼虫の個体数
調査地、調査年度、トンボ目幼虫の採集個体数、コオニヤンマ幼虫の採集個体数、および各調査時の採集個体数を示した。
調査は各年度に6回行った。基本的に、表に示した隔月に調査を行ったが、一部、都合で次の月にずれこんだこともあった。

川	調査地	調査年度	幼虫の個体数								
			トンボ目	コオニヤンマ	5月	7月	9月	11月	1月	3月	
近木川	東手川	1999	72	0							
		2000	88	0							
	本谷	1999	98	0							
		2000	93	0							
	落合橋	1997	29	4	1		3				
		1998	35	5	2	2	1				
	釘無堂	2002	46	5	4	3	1				1
		2003	87	16	4	5	6	1			
	水間大橋	1997	77	7	3	1					3
		1998	64	8	7						1
		2001	27	2					1		1
	清児橋	2001	17	1							1
2001		17	1							1	
2002		24	0							1	
脇浜	2002	24	0							1	
	2003	13	3			2				1	
梶谷川	御所ノ谷 木戸橋	1999	37	0							
		1998	48	2			1		1		
津田川	塔原 天神山 小瀬	2000	79	0							
		2002	47	0							
		2001	3	1						1	

【泉州生きもの歳時記】

シラスウナギ 白子鰻

近木川の春の風物詩の一つに、河口を遡上するシラスウナギを採集する人々の様子があげられます。胴長を履いて川に入り、腰に巻いた紐の先にタライを結び付け、金属製のネットが張られた大きな専用のタモ網を持っている私たちは、川岸を歩く人たちの目を引きます。タモ網をすくい上げ、採ったシラスウナギをタライに入れていく要領です。先日、採集している人に伺った話では、現在1kgあたり75万円で九州や四国の養殖業者に買い取ってもらえるそうです。

夜間にも発電機を使ってライトを灯し、その明かりに集まってくるシラスを採集します。脇浜潮騒橋から眺めるとその明かりが揺らめく様子はどことなく幻想的です。

シラスウナギはフィリピン沖などの海で生まれたウナギの赤ちゃんが河口にたどり着き、遡上を始める頃の透明な体をしたものを呼びますが、次第に黒くなって「クロコ」と呼ばれるようになります。その後、ウナギは5年から十数年、河川で生活するようです。主に夜間に活発に動き回り、水生昆虫、小魚、甲殻類、カエルなどを食べています。

おいしくてスタミナ食の鰻の蒲焼きは、そのほとんどが養殖ものなので、そのためにこのシラスウナギが必要になりますが、最近では日本各地で採れなくなってきているようです。近木川にいつまでもシラスウナギが戻ってくるよう見守っていきましょう。

表1からは、成虫の出現期に当たる5月から9月までの間には、幼虫の分布が中流域に集中し、その後、下流にも分布が広がっていくことが分かります。



図3. 貝塚市内におけるコオニヤンマ成虫の分布
▲ 自然遊学館所蔵標本の採集地点

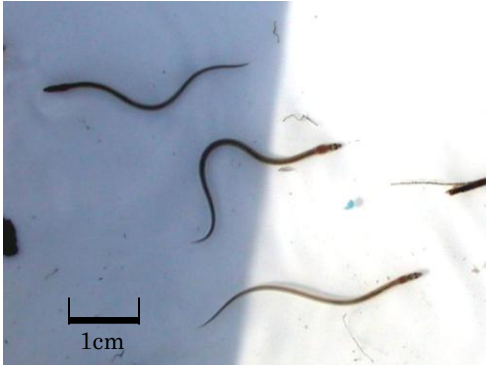
図3には成虫の採集場所を示しました。自然遊学館が所蔵する成虫の標本は8個体と少ないのですが、馬場の奥出池周辺から蕎原の東手川林道の標高約400m地点にかけて採集されていて、幼虫の分布域よりも上流側に偏っていることが分かります。河口付近の脇浜まで流されてしまった幼虫の運命はどうなるのでしょうか。

川に生息する水生昆虫はふつう、幼虫で下流に流された(移動した?)分を成虫が上流へ飛翔してカバーしないしないと、分布域がどんどん下流側に移ってしまうことになります。コオニヤンマの幼虫は、「下流へ流される」のか、「自ら移動していく」のか、また、下流に流されてしまった幼虫が無事に羽化して上流へ飛翔するのか、まだまだ分からないことはたくさんあります。

引用文献

岩崎 拓・山田浩二(2004) 近木川の水生昆虫VI.
貝塚の自然第6号: 11-25.

(岩崎 拓)



シラスウナギからクロコへ

(山田 浩二)

ユキワリイチゲ 雪割一華

キンポウゲ科イチリンソウ属。写真は蕎原の近木川沿いの斜面となった林床で、4月1日（2005年）に撮影したものです。職員の白木から「今年の群落より大きい」と聞き、館へ行く途中に立ち寄りました。当地にて偶然、元館長の上久保文貴先生に会い、その群落がある場所へ案内してもらいました。すでに満開だったので、これより前から咲き始めていたのでしょう。



蕎原に来るのは、昨年（2004年）の11月4日に、ブナの紅葉を撮影しに和泉葛城山へ登って以来のことです。私が冬眠している間、ユキワリイチゲは山麓の寒さに耐え、すでに咲き始めていたのです。ひんやりとした中にも春をむかえる暖かさを含んだ「風」に反応して、花を咲かせるのでしょうか。それは私には分からないことです。

これからいよいよ、生きものたちの生活が活気に満ちる季節をむかえます。日々、くだらない人間関係にお悩みの方には、自然の中で「風」を感じることをおすすめします。まことに残念なことです。この「風」というものは、館内で展示することができません。

上久保先生には、ユキワリイチゲのほか、ミヤマカンズゲ（深山寒菅：かやつりぐさ科：開花）、サイハイラン（采配蘭：らん科）、ホウライカズラ（蓬莱蔓：まちな科）を教えてくださいました。

(岩崎 拓)

■投稿

自然遊学館で職業体験をして

僕は、2月17日、18日の2日間、自然遊学館で職業体験をさせて頂きました。1日目は、何をしたらいいのかわからなかったけれど、2日目はだいたいのことは、わかるようになりました。小さい頃こうゆう所へ来たことがなかったから、ドキドキしていました。1日目したことは、水槽の掃除と魚と亀の餌をあげる仕事をさせて頂きました。二色の浜まで行って、色々な物をとってきて自然遊

学館の中に飾りました。すごく面白い物もあり、どう飾ろうか迷ってしまいました。保育園の子達がこの自然遊学館に来てすごくしんどかったです。でも、僕は、小さい子は好きなので少しうれしかったです。色々たいへんなこともあったけれども、とてもやりがいがありました。

2 日目にしたことは、まず魚と亀の餌をあげる仕事をしました。エサをあげる事を忘れるという事は、生き物を育てるうえで、絶対してはならない事だと改めて感じました。その後、植物を自然遊学館に飾るために探しに行きました。13 種類の植物を見つけることができました。聞いたことのない名前ばかりで「こんなにあるんだあ」と内心ビックリしていました。いざ、飾ってみると「きれいなあ」って思いました。植物ってこんなにきれいものなんだあって思いました。小さい子供連れのお母さんたちが多くこの自然遊学館に来ているということは、ここはやっぱりすごい所なんやなあーって思いました。「色々な生き物の標本を見せてくれる」と聞いて早く見たいなあと思いついて待ちました。見せてもらうと本当に色々な生き物の標本がありビックリしました。見たことのない昆虫や動物の標本があり「どれぐらいの数の標本があるんだろう？」と、疑問に思いました。ノミの標本もあり「ノミまであるんだあー」とビックリしていました。この自然遊学館は、へびやネズミとか色々飼っていてすごいなって思いました。

この感想を書きながら 2 日間のことを振り返ってしんどい事とかあったけれども、こ

の 2 日間の間に学校ではする事の出来ない体験をできてうれしかったです。この職業体験を通して、一步成長できたと思います。この自然遊学館では見たことのない生き物を見たり、世話をしたりと、すごく楽しかったです。やっぱり動物の世話をするのは、楽しいなあと思いました。この 2 日間すごくめいわくをかけてしまったと思います。でも、ここに来てすごくうれしかったです。この 2 日間本当にありがとうございました。

(貝塚市立第四中学校 2 年 久下 正太)



団体見学の保育園児に展示物の説明をする様子

※ 2005 年 2 月 17・18 日の二日間、職業体験実習として貝塚市立第四中学校の 2 年生、久下正太君、古林直也君の 2 名に自然遊学館の仕事を体験してもらいました。

貝塚市海塚で ハマデラソウ群落の初記録

貝塚市道路公園課の清水千尋氏が、2004 年 10 月 8 日(水)、貝塚市海塚の水間鉄道貝塚駅軌道内において、ハマデラソウ *Froelichia gracilis* Moq. を確認されました。貝塚市内では初記録となります。



ハマデラソウは北アメリカが原産のヒユ科の植物で、1932年に堺市浜寺海岸で牧野富太郎博

士によって発見、採集され、その後1932年、産地の名を取って和名がつけられました。アメリカから船の積み荷などに付着して海岸に運ばれ、帰化した種ではないかと言われています。帰化種といっても日本では堺市浜寺近辺でしか見られない希な種で、現在のように砂浜の環境が激減していく中では絶滅のおそれもある植物です。

『大阪府植物目録』（近畿植物同好会、1990）によると、湊・浜寺・羽衣・助松の海浜地帯から記録があり、標本が大阪市立自然史博物館に収蔵されています。『近畿地方植物誌』（村田源、2005）には、「No. 1496 ハマデラソウ VIII-IX、泉大津市助松」の記録があり、こちらは京都大学に収蔵されています。

産地	採集日	標本収蔵場所	標本番号
堺市湊海岸	1948.07.21	大阪市立自然史博物館	
堺市湊	1950.7.??	大阪市立自然史博物館	
堺市湊海岸	1951.9.??	大阪市立自然史博物館	
堺市：浜寺海岸	1952.08.24	大阪市立自然史博物館	
堺市：浜寺公園2丁	1995.08.01	大阪市立自然史博物館	OSA 115589
大阪府堺市：浜寺公園2丁	1995.08.01	大阪市立自然史博物館	OSA 115590
堺市浜寺	1961.08.31	和歌山県立自然博物館	小川由一コレクション44750
堺市浜寺	1961.08.31	和歌山県立自然博物館	小川由一コレクション172236
堺市浜寺	1961.08.31	和歌山県立自然博物館	小川由一コレクション172237
堺市浜寺	1961.08.31	和歌山県立自然博物館	小川由一コレクション172238
高石市羽衣	1961.06.28	大阪市立自然史博物館	OSA 58827
泉大津市：助松海岸	1948.08.20	大阪市立自然史博物館	
泉大津市：助松海岸	1972.08.24	大阪市立自然史博物館	OSA 13028
泉大津市助松町：墓地	1987.10.03	大阪市立自然史博物館	OSA 59535
泉大津市助松町：墓地	1987.10.03	大阪市立自然史博物館	OSA 59536
泉大津市助松町：墓地	1987.09.20	大阪市立自然史博物館	OSA 59534
泉大津市助松	VIII-IX	京都大学理学部	No.1496
大阪府	1993.08.26	滋賀県立琵琶湖博物館	1100024666
大阪府	1993.08.26	滋賀県立琵琶湖博物館	1100024667
大阪府	1993.08.26	滋賀県立琵琶湖博物館	1100024668
大阪府	1993.08.26	滋賀県立琵琶湖博物館	1100024669
大阪府	1985.06.02	滋賀県立琵琶湖博物館	1100020659
大阪府	1985.06.02	滋賀県立琵琶湖博物館	1100020660



大阪府南部のハマデラソウの分布

清水氏は、水間鉄道の車内から軌道内に白い絨毯を敷いたように咲いている花を見つけ、「この時期に妙な白い花が咲いている」と思い、道路公園課の伊藤主幹を通じて水間鉄道の助役に許可を得、軌道内に入り採集されました。最初は、まさかこんなところに、と同じヒユ科の帰化植物であるツルノゲイトウと思われたそうです。しかし、その後持ち帰った標本の形態を調べたところ、ツルノゲイトウは伸びずに這うのに対して、ハマデラソウは茎が上に伸びて直立する特徴からハマデラソウと確認されました。



軌道内に広がる群落（※清水千尋氏撮影）

野生のハマデラソウはたいへん少なく、現在では植物園や小学校などで保護・育成されたものがほとんどです。今回発見された群落は大阪府の最南端記録である可能性もあります。今後標本と文献の調査を進めながら、「遊学館だより」で報告していきます。

(西澤 真樹子)

■寄贈標本の紹介

以下の方々より標本を寄贈していただきました。お礼申し上げます。

(※2005年3月分まで)

- ◆服部加奈さん他4名より
貝塚市二色 亜種オオカワラヒワ1点
- ◆食野俊男さんより
貝塚市畠中1丁目 ホシハジロ♀1点
- ◆吉田哲郎さんより
貝塚市二色 ムクドリ1点
- ◆山口フミ子さんより
貝塚市馬場 トラツグミ1点
- ◆自然遊学館わくわくクラブの皆さんより
和歌山県桃山町 カワラヒワの巣1点
同 ヒヨドリの巣1点
同 メジロの巣1点
- ◆佐藤拓二さん、侑美さんより
和泉市和泉中央公園 ヒヨドリの巣1点
- ◆木村龍輔さんより
堺市築港浜寺町 ヒヨドリの巣1点
高石市羽衣公園 コゲラの巣
堺市浜寺公園町 カワラヒワの巣2点
- ◆児嶋格さんより

和歌山県桃山町 イカルの羽

◆食野俊男さんより

貝塚市二色 ヒドリガモの羽

◆菅尾誠二さんより

貝塚市半田 イエネコ下顎骨1点

◆牧野徹さんより

貝塚市石才

アオダイショウの脱けがら1点

◆新谷幸雄さんより

リビアのガメダス遺跡で購入したサソリ1点とサハラ砂漠で採集した砂

※動物の標本はすべて事故などで死んだものです。野鳥の巣は巣立ち後のものや、放棄された巣を採集しています。

■遊学館スタッフ日誌

2月3日 現在、世界の昆虫を展示している一画に、貝塚市内で採集された昆虫を展示しました。「貝塚市の珍しい昆虫」「里山の昆虫」「市民の森の鳴く虫」「街中で見られる昆虫」の4個の標本箱に分けて、展示しました。ぜひご覧ください。(岩崎)

2月20日 こどもエコクラブ「近木つ子探検隊」の活動として近木川、見出川、津田川の各下流でパックテストを使った水質調査を行いました。この調査は大阪府下で一斉に行われるもので、私たちの地域の川の水質がよそと比べてどの程度なのか気になるところです。1日で3箇所を回り、結構くたびれた様子でした。(山田)

2月21日 遊学館の行事「千石荘探検と

バードウォッチング」の下見でオオタカの狩りに遭遇し、不思議に思ったことがあります。オオタカが休憩をしていた枝のすぐ近くにカワラヒワの群れが怖がる様子もなく一緒に止まっていたのです。カワラヒワでは小さすぎて、えものとして魅力が少ないのでしょうか?? (西澤)

3月19日 大阪湾再生市民フォーラムが開催されました。第1部・フィールドワーク「近木川から海へ」、第2部・足元から見る10年先の大阪湾の2部構成でした。

バスで近木川の中流から河口まで移動しつつ観察した後は、浜手公民館でパネリストらによる大阪湾の再生へ向けての講演でした。特に市長が登場し、近木川河口の昔の風景を写したスライドに熱く語る様子や、二色浜の海底の様子を撮影したビデオ上映など貝塚の足元を再認識する機会になりました。
(橋本)

3月25日 清水千尋さんが発見されたハマデラソウについて、大阪市立自然史博物館で標本を調べていたところ、アメリカ産の標本の中に線路沿いで採集されたという記録を見つけ、線路＝砂地の環境なのだなあ、とあらためて思いました。日本では、海岸から遠く離れた駅の軌道内での発見はめずらしいものですが、アメリカでは意外に多いのかもしれない。(西澤)

■おしらせ

新米館長です。よろしくお願ひします。

4月1日に辞令をいただきました。小学校の校長からの着任です。カルチャーショック中です。

「自然遊学」、文字通りとしますと、大変興味があります。私はまもなく60歳になりますが、その間、自然と付き合い、遊学し、その事をも元にして、教員をしていたようなものです。例えば、3年生以上の希望者を募り、始業2時間前に登校し、「自然生活クラブ」活動をしていました。火起こし、これには苦労させられました。漫画では板に棒を手で回転させるといとも簡単に燃え出すのですが、実際は、不可能に近いのです。いろいろな素材を使ってみました、煙までなのです。火にはならないのです。当時の人の手の能力と現在人の私たちのそれとは違うからかも知れません。火に対する執念の違いからかも知れません。とにかく、燃え上がってはくれないのです。弓に紐を結わえて回転させるといとも簡単に火はつきます。わずかこれだけの道具で結果は大きく違ってきます。自然とつけ合い、自然から学び、自然と生活する中に様々な人間の文化史や文明史がありそうです。

ひよっとしますと、私は大変興味深いところに赴任したのではないかと小さな火が灯りはじめました。

(川村 甚吉)

※ 自然遊学館では、2005年3月31日を持ち

まして福本泰承館長は退職し、4月1日より新しく川村甚吉館長が着任致しました。

近木川河口模型リニューアル

近木川の河口には、近年めっきり減ってしまった干潟が小規模ながら存在します。干潟は、川や海の運んできた砂泥が堆積してできた湿地で、河口域の有機物を減らす天然の浄化槽の役割を果たします。

自然遊学館入り口に設置されている近木川河口模型は、そんな貴重な干潟を皆さんに知ってもらうために、自然遊学館5周年記念館内展示物のひとつとして平成10年に作られました。潮の満ち引きや護岸のつくりなど、近木川の河口域そっくりに再現されています。以来6年間、自然遊学館の入り口で皆さんを迎え入れてきたわけですが、最近になって傷みや塗装のはげが目立つようになってきました。

そこで昨年10月、福本前館長の指導のもと、近木川河口模型を改修することになりました。まず、河口模型で飼っているケフサイソガニ、ユビナガホンヤドカリ、アベハゼ、ミミズハゼを別の水槽に移動させ、石や砂利などを取り除きました。その後、護岸を取り外し、汚れた壁や床をきれいに洗い流してからしばらく乾燥させました。館長に切っていたいただいた護岸模型にコンクリートを薄くコーティングしてから、護岸を安定させるため、裏側に天然の粘土を敷き詰めました。護岸の設置に一番注意した点は、いかに水漏れを防ぐかということです。十分に接着するために、

2~3日かけてコーキング材を何度も塗りました。最後に、より臨場感あふれるものにするため、福本前館長に葛城山の模型を作っていただき、貯水槽の上に設置して改修工事全工程が終了しました。

改修後の河口模型は見栄えがよく、スムーズな潮の満ち引きもあり、よりグレードアップしたものとなりました(写真)。

皆さんも一度足を止め、リニューアルした河口模型をじっくりのぞいてみてはいかがでしょうか。

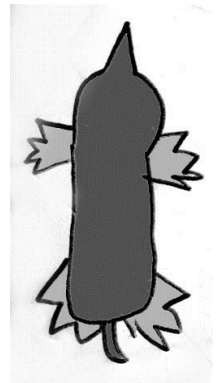


リニューアルした河口模型

(山田 量崇)

自然遊学館だよりの表紙に 子どもの絵が登場します

自然遊学館には、来館した市民のみなさんに展示の感想や質問を書いていただくノートがあります。今号から、そんな子どもたちの描いてくれた楽しいイラストが表紙に登場します。



この絵はモグラのなかまの「ヒミズ」です。鼻先の特徴がとてもよく出ています。哺乳類コーナーの標本を見て描いてくれたのでしょうか。表紙を見たら「あ！わたしの絵だ！」ということもあるかも??遊学館に来たら、ぜひノートに絵や感想を残して下さいね!

(西澤)

「貝塚の自然 第7号」が 発行されました

自然遊学館の2003年度の活動報告を収めた年次報告書「貝塚の自然第7号」が発行されました。市内の学校、図書館、文献交換をしている博物館などに配布しているほか、館内のロビー、多目的室に置いていますので、ご自由にご覧ください。

秦祐宣・貝塚の植物写真展

4月2日より、関空交流館にて貝塚市半田にお住まいの秦祐宣氏が撮影された貝塚市の植物(自生種・栽培種)150点を展示しています。お気軽にお立ち寄りください。

場所：関空交流館1階(自然遊学館から徒歩1分)

期間：2005年4月2日～5月8日

自然遊学館だより 2005 春号 (No. 35)

貝塚市立自然遊学館

〒597-0091

大阪府貝塚市二色3丁目26-1

Tel. 0724 (31) 8457

Fax. 0724 (31) 8458

E-mail: shizen@city.kaizuka.lg.jp

<http://www.city.kaizuka.osaka.jp/shizen/index.htm>

発行日 2005.4.11

この小冊子は市内印刷で作成しております。